

吉田初三郎の鳥瞰図を使った地形地質観察会

に い だ しゅういち
新井田 秀一(学芸員)

ただ しゅういちろう
武田 周一郎(神奈川県立歴史博物館 学芸員)

はじめに

神奈川県立生命の星・地球博物館(以下、当館)では、学習支援活動の一環として、開館以来「地形地質観察会」を年に3回程度開催しています。神奈川県内各所にある面白い地形や地質などを、当館学芸員が主となり解説しながら見て回るものです。10 km程度のコースを設定し、4～5時間かけて歩いて巡るのが定番です。ここでは、2020年と2021年に少し変わったパターンでの開催を試みましたので、紹介します。

「神奈川県鳥瞰図」への注目

吉田初三郎作の「神奈川県鳥瞰図」(1932: 図1)をご存じですか。この図は、神奈川県立歴史博物館の収蔵資料で、昭和初めの神奈川県内の観光名所を紹介した鳥瞰図です。また、これを基にした印刷物が「神奈川県観光図絵」(1933)として発行されています。吉田初三郎の描く鳥瞰図は、地域の姿を伝えるメディアとして関心が高まっています(昭文社編, 2021)。特にこの図は、府中市美術館の展覧会で国立公園を描いた絵画として位置づけられて展示されるなど、分野を超えた分析が進んでいます(大澤, 2021)。

筆者らは、自然系と人文系の学芸員として、この図を双方の視点から分析し、2017年には県立歴史博物館の講座で紹介しました(新井田・武田, 2019)。ここでは、自然科学的な視点から、描かれている地形・地物(景観)について、CGによる構図の再現などを用いて説明しました。また、人文科学的な視点では、絵図や関連資料を通じて描かれた目的や時代背景を解説しました。

室内+野外を1日で

この講座を実施した後、次の段階と

して、座学に止まらず実際に野外で絵図と地形を比較するプログラムを実施したいと考えました。当館の地形地質観察会として開催する場合、野外観察が中心になります。そこで、同日午前中に座学を組み込む形式で企画しました。ほかの方法としては、複数日にまたがる連続講座も考えましたが、参加者の負担が大きくなるため、1日で完結するようにしました。

参加者のメリットとして、室内での解説であれば地図などの資料を落ち着いて見られる点が挙げられます。今回の観察会では、座学を行う室内に地図類を掲示しました(図2)。普段の観察会でも、大きく拡大した地図類を現地での解説に使う場合があります(図3)。しかし、野外の観察点での説明では、場所によっては狭く、参加者以外の通行もあるため解説に集中しづらい欠点があります。室内での解説であれば、このような懸念は解消できます。

デメリットとしては、観察コースを歩く時間が普段の半分、およそ5 km程度と短くなってしまう点があります。また、座学の会場が必要になるため、コース設定の自由度が減ってしまう点もあり、今後の検討課題です。

今回は当館講義室を用いて、当館周辺を紹介するコースを設定しました。当



図2. 観察会の様子(座学にて地図類を掲示する)。



図3. 観察会の様子(野外にて地図類を示す)。

日のタイムスケジュールは、10時に当館へ集合し、当館講義室で座学と昼食を取ったうえで、12時半に野外観察へ出発し、15時ごろ解散としました。

鳥瞰図の「合わせ技」

今回の観察会では、神奈川県鳥瞰図をはじめとする吉田初三郎の鳥瞰図を用いて、当館が立地する神奈川県西部の地形地質を理解することを目的としました。その趣旨を示すために副題を「神奈川県鳥瞰図スペシャル」としました。

メインの素材とする「神奈川県鳥瞰図」(図1)は、県単位の広域をカバーしているため、小田原箱根地域に注目する場合、どうしても情報量は少なめになってしまいます。そこで、より狭いエリアの市町村単位で描かれた鳥瞰図を併用すれば、情報量の不足を補えます。市町村単位のものとして「小田原景勝鳥瞰図」(1942年頃: 図4)と「箱根名所図絵」(1919年頃: 図7)を用いました。このような工夫によって、より細かなレベルで地形や歴史が理解できることに加え、絵図2種類と現在の比較を通じて景観の変化が解説できました。

コースと内容

1回目の観察会は、当館の立地する小田原を中心として、2020年11月7日(土)に行いました。「神奈川県鳥瞰図」と比較検討した「小田原景勝鳥瞰図」(図4)は、小田原が市制を敷いた1940年以降の作成と推定され、小田原城を中心とした市内の様子が描かれています。特に、同時期に整備された明治天皇聖蹟(せいせいせき)が詳しく紹介されています。



図1. 神奈川県鳥瞰図(神奈川県立歴史博物館所蔵)。



図4. 小田原景勝鳥瞰図(神奈川県立歴史博物館所蔵)。

観察会では、午前中の座学で筆者らが両図について解説し、午後の野外観察では当館の地質担当の学芸員が講師に加わりました。当館から箱根板橋駅まで電車で移動し、鳥瞰図に描かれている「板橋地蔵尊」、「明治天皇聖蹟」などの名所旧跡や、箱根火山溶岩の露頭や火山地形が遠望できる場所を観察するコース(図5)を巡り、小田原駅前で解散しました。

2回目は、箱根を中心として2021年5月9日(日)に行いました。比較資料として用いた「箱根名所図絵」(図7)は、箱根登山鉄道が強羅まで延伸する1919年前後のものと推定され、箱根カルデラ内の名所旧跡などを、自動車道や歩道で結び紹介しています。本図は、1923年の関東大震災以前に発行されたものであり、震災後に描かれた「神奈川県鳥瞰図」と比較すると、地域の変化がよく理解できます。



図5. 観察コース図(小田原)。

野外観察では、当館から箱根湯本にかけて「(三枚橋)発電所」、「三枚橋」、「白(石)地蔵」など鳥瞰図に描かれている景観が観察できるようなコース(図6)を設定しました。

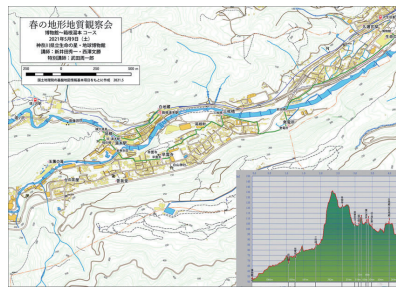


図6. 観察コース図(箱根)。

前回と同様に当館の地質担当学芸員が加わって各担当分野の観点で解説しながら、箱根湯本駅までのコースを巡りました。

成果と課題

両回ともコロナ禍での実施ではありましたが、2020年は26名、2021年は58名と定員各20名を上回る応募があり、抽選の結果それぞれ16名と7名に参加していただきました。

参加者アンケートでは、吉田初三郎の鳥瞰図に興味を持ったという声が寄せられた一方で、第1回 小田原の観察会では、思っていた内容ではなかったという意見もありました。普段の観察会と比べると地形地質への深い言及が少なく、参加

者の期待に沿えなかった面があったと思われます。このような反応を踏まえ、第2回 箱根ではコース設定を工夫するとともに、地形地質と人間の活動との関連について岩脈や温泉、凝灰岩^{ぎょうかいがん}の石材利用などの観点から解説しました。

以上2回の試みを通じて、地形理解に対する鳥瞰図の有効性が確認できました。特に座学と野外観察との組合せでは、まず県を単位とした鳥瞰図で地形や歴史の概略を把握し、次に市町村スケールの鳥瞰図を使ってより細かなレベルで説明する方法が効果的であると考えます。鳥瞰図は地域の姿を視覚的に捉えるために適した資料であり、野外観察の解説資料として今後の活用が期待されます。

なお、この事例は、日本地図学会2021年度定期大会で報告しました(新井田・武田, 2021)。また、JSPS 科研費19K01149, 19K13451の助成を受けて実施したものです。

参考文献

- 大澤真理子 2021. 「旅行の時代」の風景表現—国立公園絵画と吉田初三郎. 府中市美術館編『映えるNIPPON 江戸〜明治 名所を描く』. 17-23 pp. 府中市美術館.
- 新井田秀一・武田周一郎 2019. 鳥瞰図を題材とした自然系・人文系博物館による協働研究—吉田初三郎の「神奈川県鳥瞰図」を事例として—. 日本地図学会2019年度定期大会発表論文・資料.
- 新井田秀一・武田周一郎 2021. 吉田初三郎の鳥瞰図を用いた博物館講座の実践と課題. 日本地図学会2021年度定期大会発表論文・資料.
- 昭文社編, 岡田直解説 2021. 『吉田初三郎 鳥瞰図集』昭文社.

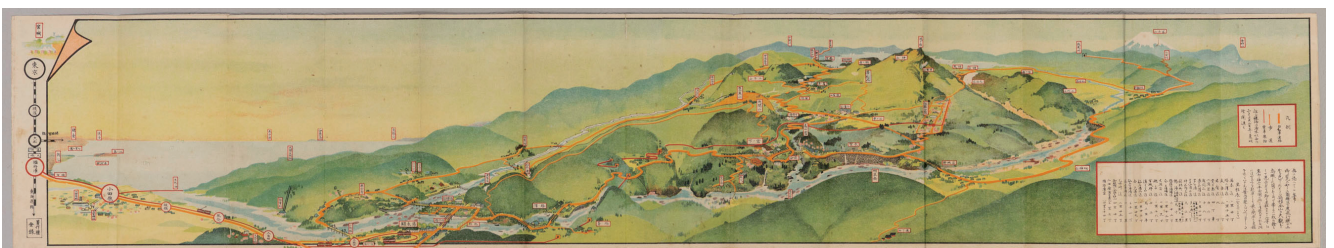


図7. 箱根名所図絵(神奈川県立歴史博物館所蔵)。